
皇妃候補は麗しく

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇妃候補は麗しく

【Nコード】

N2163BA

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

＊「俺の後になって国を治めようぞ！」

おおよそ、男が男に対して言う言葉ではない。

「はぁ」

目の前の青年に、彼は呆れて大きな溜息を吐き出すのだった。

※小説サイト「野いちご」にも掲載している作品です。

*皇子と青年

「……」

彼——ベリル・レジデント——は、自分の手を握りしめて潤んだ瞳で見つめる青年に眉をひそめた。

以前、ルシエッティ王国のノエル王女の護衛を頼まれた事から目の前の青年、レオン皇子とのつながりがある。ここは、ルシエッティ王国の隣国に位置するフォシエント皇国の皇族が住まう城——第一皇位継承者であるレオン皇子の自室だ。

元々はノエル王女を狙っていたレオン皇子だったが、ベリルに諭^{さと}されそのまま彼に恋をしてしまったのだ。

何故、彼がわざわざレオン皇子の処にいるのかというと……

「いい加減にしろ。依頼も無いのにひっきりなしにオフアの電話をかけおって」

高級ソファに腰掛けて足を組み、握られていない左側で片肘をついてその上に頭を乗せる。黒髪と漆黒の瞳は、そんなベリルを捉えて離さない。

金のショートヘアとエメラルドの瞳は、整った中性的な容姿に相応しく見た者を魅了する。細身だが、引き締まった体は見た目の想像とは異なり筋肉質だ。

ソフトデニムのジーンズに黒のインナーと半袖のブラウンの前開きシャツを合わせた格好をしている。

傭兵であるベリルは、携帯にかかってくる依頼を受けて仕事をこなす。しかし、その携帯に四六時中レオン皇子から電話がかかってくる。

彼は、その抗議のためフォシエントに訪れたという訳だ。

***皇子と青年（後書き）**

*「お姫様のガーディアン」の続編でもありますので、そちらの方も是非読んでみてくださいです。

もちろん、この作品からでも十分にお読みいただけます。

*争奪戦

「……」

こいつ、無視する気か……満面の笑みを浮かべて手を握り続けるレオン皇子に、眉間のしわを深く刻んだ。

「大体、同性を正室だか側室だかに加えた皇族など今までののか」「いるよ」

しれっと応えられ、言葉が出ない。

「同性愛が認められているのは皇族だけなんだ。むしろ折角なんだからって同性を側室に入れる者もいたと聞いた」

それにベリルは頭を抱えた。

19歳のレオンは第一皇子で、現在の皇帝はムカネル皇帝50歳。皇族が支配する独裁国家だ。

その時——コココ！ ガチャ！

「レオン、正室候補って誰？」

ノックが無意味なんではと思われる速度で扉が開き、赤いドレスに身を包んだ女性が入ってきた。

「姉上……」

「！ 男じゃない」

レオンが手を握りしめている人物を凝視する。

赤いドレスに見事なウェーブのかかった栗毛を背中まで流し、ブラウンの瞳は艶を帯びている。

この国では男子がいた場合、基本的に第一子の男子、つまり長男が第一皇位継承者となる。

「ふん」

長女であるレオナ皇女は、ベリルの顔をじっと見つめた。

「あなた、名前は？」

「ベリルだ。もういいだろう」

レオンが代わりに応えるが、どうやら彼は姉が苦手のようなだ。弟

の声などスルーして、彼女はベリルを見定めるようにまだ眺めている。

金髪のショートヘアにエメラルドの瞳。そして、その整った顔立ちにフツ……と笑みを浮かべたレオナに、レオンはギクリとした。

「決めた！ あなた、私の部屋に来なさい」

「は……？」

「！？ だめですっ」

青年はガバツと立ち上がり、彼女の行動を遮った。

「いいじゃない。気に入っちゃったんだもん。あんたには勿体ないわ」

「だめです！ ベリルは俺が見つけてきたんだ。絶対に渡しません。姉上はそうやって、いつも俺のお気に入り奪っていく！」

「……」

ベリルは2人のやりとりを呆然と見上げていた。

「ほらっ見なさい」

「うっ……？」

レオナはベリルの腕をグイと引っ張り、立ち上がらせる。

「私に似合うでしょ」

人をアクセサリーのように言い放つ。

「！ あら、あなた。レオンより低いのね」

ベリルを見上げてつぶやいた。彼は174cmでレオンは178cmに、レオナは157cmだ。

「あなた、年齢はおいくつ？」

「……25だ」

「姉上！ 彼の手を離してください」

「私は24歳だから丁度良いわね」

レオナは無視して続けた。

何が丁度良いのか解らないが、とりあえず掴まれている腕を離して欲しいとベリルは思っていた。

「さ、行きましよ」

「だっ、だめです！」

ベリルの腕を引っ張って部屋から出ようとするのを止めようと、反対側のベリルの腕を掴む。

「レオン！ 姉の言うことがきけないの！」

「これだけは嫌です！」

2人はベリルを引っ張り合った。

「……」

段々と腹が立ってきた。

「いい加減にせんか！」

勢いよく2人の手を引きはがし、交互に睨み付けた。

「私はお前たちのオモチャではない」

「当たり前だ。俺の正室になるんだから」

「あなたは私の側にいればいいのよ」

ベリルはギロリとレオンを睨むと、ビシッ！ と指を差した。

「私がいつ、それを認めた。勝手に決めてもらっては困る」

そして次にレオナに指を差す。

「私はお前のアクセサリーではない。似合うとはなんだ」

「……」

怒鳴られて2人は沈黙した。それにベリルは大きく溜息を吐き出す。

「あなたの声、いい声ね」

「何……？」

彼女は見上げて嬉しそうに微笑んだ。

「やっぱりあなたには勿体ないわ。私に譲りなさい」

「姉上は横暴だ！」

「……」

こいつら何を聞いてたのだ。

「いい加減にしてくれ」

ベリルは右手で顔を覆い、深い溜息を吐き出した。

＊急襲（きゅうしゅう）

「俺の正室になる人です！ 絶対に渡しません」

「いくらなんでも正室を男にするのは止めなさい。私に渡せばいいのです」

この国の皇族は一夫多妻制だ。血筋を絶やさないためのものだが、さすがに男性を正室として迎えた者はいない。

「！」

2人のやりとりをはしばらく眺めていたベリルの耳に、カチリ……という微かな音が聞こえた。

視線をゆつくりとそちらに向ける。

視界の先には部屋の扉があり、静かに開かれていく——それに気付いたのはベリルだけだ。

「？」

音もなく開かれる扉を、怪訝な表情で見つめる。

「！」

そんな彼の目に入ってきたのは、消音器サイレンサーを取り付けた銃身だった。

「伏せろ！」

「えっ！？」

「何っ！？」

ベリルは声を張り上げながら、扉の人影に駆け寄った。軽い破裂音が2〜3度して、銃弾がレオンめがけて放たれる。

「きゃああ！」

「！ なんだ？」

「レオン様の部屋からだ」

レオナの叫び声で、外にいた侍女たちや衛兵たちがざわついた。

「ベリル！」

ハンドガン

拳銃を持った男と対峙しているベリルの名を呼び青年は見つめる。相手はレオンを狙うために必死だが、それは動きの予測も付けやす

くなる――

「チッ」

持っていた男の武器を蹴りで弾くと、舌打ちをして逃げていった。

「ふむ……」

小さく溜息を吐いて、ハンドガンをゆっくり拾う。

「皇子！ お怪我はっ!？」

それから、ようやく衛兵が駆けつけた。その衛兵にハンドガンを手渡して、再び小さく溜息を漏らす。

「……ベリル」

「どの国にも、ああいう手合いはいるものだな」

駆け寄ったレオンにつぶやき、震えているレオナに近づく。

「心配ない。もう誰もおらんよ」

「怖かったわ」

「部屋に戻って少し眠った方が良い」

抱きつこうとした彼女に優しく発した。

「そうね」

足取り重く部屋から出て行く。

「私は帰らせてもらう」

「！ ベリル」

引き留めようとベリルの右腕を掴んだ刹那――

「!？ ベリル!？」

ガクンと折れるように彼が片膝を付いた。その顔は痛みに歪んでいる。

まさか弾が当たったんじゃない？

「早く医者を！」

「！ だめだ」

医者を呼びに行こうとしたレオンの腕を掴んで制止した。

「なんで……っ!？」

そうしている間にも胸の辺りがみるみる血でにじみ、苦い表情のベリルと胸を交互に見やる。

「死んじゃうよ……」

「死にはしない。少し、休ませてくれないか」

今にも泣き出しそうな青年に笑みを浮かべた。

「こ、こっち」

震える声で彼を寝室に案内した。

*怪訝

「大丈夫？」

小さく唸りを上げてベッドに横たわるベリルに声をかける。逃げた侵入者は、城の者たちが引き続き追ってはくれるが油断はならない。

「……」

心配そうに見下ろしている青年を一瞥し、溜息を吐き出す。

「痛みには慣れているが消えるものではないな」

「当り前だよっ！ 俺のために……」

この量は危険なんじゃないだろうか……胸の血に眉をひそめる。大丈夫だとは言われても、赤く染まっている胸元は青年を不安にさせた。

彼の表情からして落ち着いているようにも見えるが、閉じた瞼がまぶたぴくりと動く度にドキリとする。

「運良く当たるとは相手も腕が良い」

「運悪くだろ……」

溜息混じりにつぶやいた言葉に呆れながら応えるも、やはり少しでも何かしないという気持ちを抑えられない。

「とっ、とにかく止血だけでも！」

「！ 構うな」

服を掴んだ青年を制止したが、彼の様子と服の状態に怪訝な表情を浮かべた。

「血が止まってる……もう？」

* 膚

彼の胸を見て青年は呆然とした。血が流れている様子がまるで無く、先ほどよりも元氣に見える。

「どういうこと？」

目を丸くしている青年に小さく溜息を漏らし口を開いた。

「私は不死なのだよ」

「不死!？」

何それ!？　と思ったが……

「じゃあ、死なないんだね」

「うむ」

彼の声に青年はホーっと胸をなで下ろした。

「良かった」

うつむいてぼそりとつぶやいた青年に目を細めたが、次の行動で眉をひそめる。

「なんの真似だ」

「折角なんで」

ベリルの横に寝ころび彼に腕枕をして、ギュツと抱きしめる。

「離せ」

「嫌だ」

無理矢理、引きはがそうとしたベリルだが悲しそうに見つめるレオンの瞳に、その手を止めた。

回復するまでは仕方がないとスルーを決め込む。しかし、青年は抵抗しなくなった彼をグイと引き寄せた。

「っよせ!」

制止も虚しく唇を奪われる。痛む体で抵抗していたが、深いキスに手に力が入らなくなった。

「……っ」

ど、どいつもこいつも……私をなんだと思っているのだ!　痺れ

るような感覚の中、ベリルは怒りをふつふつとたぎらせていた。

「……はっ」

ようやく解放されて息を吐き出し、青年を睨み付ける。

「いい加減にせんか」

「ベリルって抱き心地いいね」

やっぱり無視かこのやろう。腹は立つが、まだ回復していないだるい体を起こすのは面倒だ……とベリルは溜息混じりに、青年の我が儘に付き合ってやる事にした。

心臓の音に目を細めるベリルを静かに抱きしめる。

しかしふと――

「不死……？」

「ん？」

ぼそりとつぶやいた青年に顔を向けた。

「不死ってホント？」

「今頃か」

事の重大さによりやく気が付いたらしい、ベリルを見る目が点になっている。

「うっ？」

このまま説明しろというのか……身を起こそうとしたが引き留められ眉間にしわを刻む。

「不死って、不老不死？」

「そうだ」

しばらくの沈黙――

「もしかして、見た目通りの歳じゃないとか？」

「聞きたいか」

「いい、聞かないでおく」

聞くのが怖い……半笑いを返し、ふと思いきす。

「もしかして正室になれないのって、それが理由とか？」

「それ以前の問題だと考えないのか」

確かにそれが一番の問題ではあるのだが、それがなくても願ひ下

げだ。

「じゃあ、愛人に……」

言い切る前に制裁が加えられる。

「!? つうく……」

青年はスネを蹴られて悶絶した。

「!」

起き上がった彼に少し悲みを向けるが、これ以上我が儘には付き合ってくれそうもない。

「! あ、服……着替えた方がいいね」

「ん? ああ」

傷は治るといっても、流れた血まで消える訳じゃない。胸の辺りは流れた血でべっとりだ。

「こっちに洗面台があるから、そこで体を拭いて。タオルは自由に使ってよ」

「すまん」

「命の恩人がなに言うの」

笑ってクローゼットを開く。

ベリルは洗面台の鏡で銃弾を受けたヶ所を確認した。まだ少し傷跡があるが、あと1時間もすれば消えるだろう。

しかし、銃弾が貫通した軌道の破壊された内部は回復にもう少し時間がかかりそうだ。

「……っ」

タオルを濡らし血を拭き取っていく、その痛みに顔をしかめた。

「これ、俺の服だけど」

「ん、そこに置いてくれ」

服を持って入ってきた青年に応える。

「なんだ」

自分を見つめるレオンに怪訝な表情を浮かべた。

「やっぱ格好いいなと思って」

「！ よせ」

青年は静かに近付いて後ろから抱きしめた。

「何もしないから、このままでいさせて」

レオンはベリルの温もりに浸った。

やっぱり諦めたくない……ベリルを好きになったのは衝動でも気まぐれでもない。彼に見つめられて、そのエメラルドの瞳に吸い込まれそうになった。

何もかもを見透かされているような、何もかもを許すような……そんな愁いを帯びた優しい瞳。

「このまま、君を閉じこめたい」

耳元でささやくように青年は発した。

鏡に映される青年の表情には、少しの狂気が宿していた。

「！」

しかし同時に、映っているベリルの瞳に毒氣^{どくけ}を抜かれる。

*憂い

「ごめん……」

うつむいて抱きしめていた腕をゆるめる。

「お前の望みは叶えられん」

「うん、解ってる」

無言でうつむく青年を一瞥し、服を着る。着終わる頃には青年の気分も多少、戻ったのか顔を上げた。

「いつから不死なの？」

「25からだ」

「えと、25ってどれくらい前……ハッ!？」

それを聞いたら今、彼が何歳が解ってしまう!？ 歳を聞くのはなんか怖い!

ベリルは、半笑いのまま固まった青年に目を据わらせる。青年は頭を振って気を取り直し、再び問いかけた。

「ど、どうして不死になったの？」

「色々あってね。まあ偶然というやつだ」

「ぐ、偶然? へえ……あ」

少し大きめの服を整えてリビングに向かうベリルの後を追う。

「ベリル——っ! ……?」

部屋に入り、何か言いかけた青年を手で制止する。険しい表情を浮かべて辺りを窺い、窓に目を向けた。

「逃げなかったのか」

「え?」

体勢をやや低くして青年を自分の背後にし、無表情な声色ながらも強く発する。

「いるのは解っている」
すると——

「!」

中庭が見える窓が静かに開かれて、ゆっくり入ってきたのは先ほどレオンを襲った人物だ。

「お前は！」

「勘が良いな」

「衛兵！ えい……っ」

青年が兵士を呼ぶのをベリルが無言で止めろと示した。

「どうして……」

「また逃げられるのがおちだ」

侍従の恰好をしているが、その鋭い眼差しは戦いをくぐり抜けてきた者の目だ。

「何故、彼を狙う」

「報酬がよくてね」

固い黒髪にブラウンの瞳の男は薄笑いでベリルを見つめる。

「なるほど」

予想通りの答えに同じく薄笑いを返した。

「お前からは憎しみは感じられなかった」

「ご名答。独裁国家には暗殺はつきものだろ」

「お、俺の国に反乱分子がいるっていうのか！？」

「まだお前の国じゃないだろ」

男はスパッとやってのけた。

「アサシン……ナイトウォーカーか？」

「残念、暗殺者でも盗賊でもないよ」

口の端を吊り上げて応えようと、ベリルに睨みを利かせる。

「さっき、そいつがベリルって言ったな。もしかしてお前『死なない死人』か」

「死なない死人……？」

「私にはいくつか名前があるようですね」

後ろから怖々と問いかけた青年に応えながらも、男から目は離さない。

「実際にお目にかかれて光栄だ。どうりで一発、胸に当たったはず

なのに平気な訳だ」

「どうするね」

諦める様子の無い男に訪ねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163ba/>

皇妃候補は麗しく

2012年1月13日16時54分発行